

駅の不正乗車捕物帖

今から半世紀前、ある私鉄駅で見習い駅員をやっていた。今日賑わっている駅施設や周辺環境を考えると、庶民的でおおらかだった当時の時代風景には今昔の感を憶える。

あの時代は豪雨になっても強風が吹いても新人駅員は黙々と改札口に立ち続け、新人なりに正義感に燃え不正乗車は一人たりとも見逃すまいと、乗降客の挙動に必死に目を凝らしていた。時には酔っぱらいに絡まれたり、難癖をつける乗客に往生しながらも少しずつ経験を積み重ねて、社会人としての作法を身につけていった。だが、その一方でストレスが溜まることも多かった。

普段からストレス解消と退屈しのぎにはどうしたら良いか頭を悩ませていた。その頃制止の手を振り切って逃げる乗客が結構多かった。熟慮の末不正乗車客を槍玉にあげることを思いついた。ある時逃げようとする乗客に思わず大声で「ドロボー！」と叫んで、思い通りその乗客をすくませてはみたが、駅前交番のお巡りから「ドロボーとは言い過ぎ」とお目玉を食らった。次には軽快な運動靴に履き替えて追いかけたが、時にカモシカ少年もいて逃げきられ、地団駄を踏んだものだった。

そんな時最も効果的だったのは、ラグビーで磨いた得意技を活かすことだった。改札口から逃げられた瞬間すぐ後を追ひ、背後からタックルして見事「お客様」を仕留めた。相手もまさかタックルまでされようとは思ってもみず、倒されたまま観念するよりほかなかった。これが2度、3度と成功した。そのうちにこの駅には元気のいい駅員がいると噂になり、中にはラグビーをやっていたんですかと話しかけられて照れくさい思いをしたことも、今となっては懐かしい青春時代の一コマである。

それが今や都心の駅では利用客も増えてIT化が進む一方で、改札口やプラットフォームに駅員の姿を見かけることも少なくなった。駅員と地域住民との会話と交流の機会も減って、駅を出会いと交流の場にしようとアピールする試みに反して、駅周辺にはただ騒がしいだけの無機質な空気が漂い、時代の流れとは言え、あの牧歌的だった時代を振り返ると何とも寂寥の感は拭いきれない。

(近藤節夫)